

小林秀雄著『本居宣長』：二十三章主題〔(Ⅰ)宣長『言語観(言霊論)』〕。及び(Ⅰ)と、(Ⅱ)恒存『演劇的關係論』との一致(「關係論」的纏め)。

(Ⅰ)『言霊』關係論：《『言霊』(物：場 C')とは、その知的理解、即ち「語(物：場 C')⇒釋(D1)」ではなく、その働き[即ち、合體(Eの至大化)=轉義(D1の至大化)]である》

* ①『萬葉』(物：場 C')②『言霊』(物：場 C')③古言(物：場 C')⇒からの關係：「①に現れた②といふ③に含まれた、②の「④：本義を問ふ[知的理解、即ち：語(物：場 C')⇒釋(D1)する]のが問題ではない」⇒「⑤：俗言(さとびごと)」(④的對立概念F)⇒E：「⑤の働きといふ『具體的な物』(即ち：F⇒Eの至大化)としつかりと合體(Eの至大化)して、この同じ古語(②『言霊』)が、どう轉義(D1の至大化)するか、その様[即ち、合體(Eの至大化)=轉義(D1の至大化)]を眼のあたり見る(Eの至大化)のが肝腎なのである」(⑤への距離獲得：Eの至大化)⇒宣長『うひ山ぶみ』(△粹)。

* ①語義[然り云ふ本(物：場 C')]②古人(物：場 C')⇒からの關係：①を分析して本義正義を定める(D1の至小化)は緊要に~~あらず~~(D1の至小化)。「③：②の用ひたる所(D1)を、よく考へて(D1の至大化)[即ち、P219『すべて人・よみ人(物：場 C')の心(D1)を、おしはかりえて(D1の至大化)』]、⇒「④：言」(③的概念F)⇒E：『云々(しかじか)の④は、云々(②)の意(D1の至大化)に用ひたり(Eの至大化)といふことを、よく明らめ知る(即ち、Eの至大化=D1の至大化)を、要とすべし。④の用ひたる(Eの至大化)意(D1の至大化)[即ち『よみ人②(物：場 C')の心(D1の至大化)』]をしらで(D1の至小化)は、其所(②)の文意(D1)聞えがたく(D1の至小化)、又みづから(△粹)、物(物：場 C')を書く(D1の至小化)にも、④の用ひやう(E)たがふ(Eの至小化)こと也⇒宣長『うひ山ぶみ』(△粹)。

(Ⅱ)演劇的關係論：①場(C')⇒からの關係(①から生ずる)：②心の動き(D1の至大化)を⇒「③：せりふ(言葉)」(②的概念F)⇒E：③の力學(③の用法：Eの至大化)で形(E)ある物にして見せる(Eの至大化)」(③への距離獲得：Eの至大化)⇒人間(△粹)：①への適應正常。(恒存評論『せりふと動き』)

①場(C')⇒から生ずる：「②關係(D1)と稱する實在物(D1の至大化)は、」⇒「③：言葉(F：せりふ)」(②的概念F)⇒E：「潜在的には一つの③によつて表し得る(E)。故にその③との附合ひ方[言葉の用法・言葉との距離測定・フレイジング・so called(即ち：Eの至大化)]によつて、(△粹)は①との關係の適應正常化(D1の至大化)が叶へられる。即ち「Eの至大化=D1の至大化」⇒人間(△粹)。

(物：場 C')...

(Ⅰ)：* ①『萬葉』(物：場 C')②『言霊』(物：場 C')③古言(物：場 C')。

* ①語義[然り云ふ本(物：場 C')]②古人(物：場 C')。

~~~~~

(Ⅱ)：①場(C')

からの關係(D1の至大化)

(Ⅰ)：

\* 「①に現れた②といふ③に含まれた、②の「④：本義を問ふ[知的理解、即ち：語(物：場 C')⇒釋(D1)する]のが問題ではない」。

\* ①を分析して本義正義を定める(D1の至小化)は緊要に~~あらず~~(D1の至小化)。「③：②の用ひたる所(D1)を、よく考へて(D1の至大化)。

(Ⅱ)：\* (①から生ずる)：「②心の動き(D1の至大化)を」。  
\* から生ずる：「②關係(D1)と稱する實在物(D1の至大化)は、」。

(△粹)宣長

F(言葉・概念)...

(Ⅰ)：\* 「⑤：俗言(さとびごと)」(④的對立概念F)。\* 「④：言」(③的概念F)。  
~~~~~

(Ⅱ)：「③：せりふ(言葉)」(②的概念F)

E：[F(言葉・概念)との附合ひ方・用法]...「So called」Fと(△粹)との距離獲得「(Eの至大化)。

(Ⅰ)：* 「⑤の働きといふ『具體的な物』(即ち：F⇒Eの至大化)としつかりと合體(Eの至大化)して、この同じ古語(『言霊』)が、どう轉義(D1の至大化)するか、その様[即ち、合體(Eの至大化)=轉義(D1の至大化)]を眼のあたり見る(Eの至大化)のが肝腎なのである」(⑤への距離獲得：Eの至大化)。

* 「『云々(しかじか)の④は、云々(②)の意(D1の至大化)に用ひたり(Eの至大化)といふことを、よく明らめ知る(即ち、Eの至大化=D1の至大化)を、要とすべし。④の用ひたる(Eの至大化)意(D1の至大化)[即ち『よみ人②(物：場 C')の心(D1の至大化)』]をしらで(D1の至小化)は、其所(②)の文意(D1)聞えがたく(D1の至小化)、又みづから(△粹)、物(物：場 C')を書く(D1の至小化)にも、④の用ひやう(E)たがふ(Eの至小化)こと也」。
~~~~~

(Ⅱ)：\* ③の力學(③の用法：Eの至大化)で形(E)ある物にして見せる(Eの至大化)」(③への距離獲得：Eの至大化)。

\* 「潜在的には一つの③によつて表し得る(E)。故にその③との附合ひ方[言葉の用法・言葉との距離測定・フレイジング・so called(即ち：Eの至大化)]によつて、(△粹)は①との關係の適應正常化(D1の至大化)が叶へられる。即ち「Eの至大化=D1の至大化」。